

たけしと第1次隊とカラフト犬

動物だって隊の一員！

現在は南極への動物の持ち込みは禁止されていますが、初期の観測隊は犬ぞり用のカラフト犬をはじめとする動物を日本から連れて行って行っていました。犬と猫はケンカしがちなものですが、南極では仲良しだったようで、たけしが第1次隊越冬中に生まれた子犬とじゃれて遊ぶ様子や、子犬たちを引き連れて歩く様子も見られました。



【子犬と遊ぶたけし】



【たけしは子犬の大將】



【子犬たちを見守るたけし】

隊員の中でも、たけしをひときわかわいがっていたのが、^{さくまとしお}作間敏夫隊員でした。ある日たけしは、^{せん}通信を専門とする作間隊員の部屋の大型通信機の中にもぐり込み、^{もん}高圧線にふれて感電してしまいます。猫が好むこたつがない昭和基地で、たけしは、熱を発する機械で暖をとっていたのです。倒れたたけしはそのまま数日間眠り続けましたが、^{かんびょう}隊員たちの^{かい}看病の^{いちめい}甲斐もあり、一命を取りとめました。

また、^{おそ}トウゾクカモメに襲われ、^{げきたい}なんとか撃退していた、^{もくげき}という目撃談も。越冬中は思わぬ危険があったようです。



【たけしや子犬とたわむれる作間隊員】

たけしはカラフト犬のように犬ぞりを引いたり、研究対象とされなかったため、残されている記録はわずかです。しかしそのどれもが、隊員に抱えられていたり、行事などの集まりにちゃっかり参加していたりと、とても和やかなもの。いつでも皆にかわいがられ、ペットとして大活躍していたのがわかります。

ひょんなことから南極へ同行したたけしは、いつの間にか隊の一員として欠かせない存在になっていたのではないのでしょうか。



【11人の第1次越冬隊(1人は^{さつえい}撮影係)】



【^{しょうぎ}将棋観戦】



【天ぷらパーティー】